

見本

令和 6 年 度

医 学 部 看 護 学 科

特 別 選 抜

小 論 文

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
2. この問題冊子には、表紙を除いて問題用紙は 3 枚、解答用紙は 3 枚、下書用紙は 3 枚あります。試験開始の合図があってから確認してください。
なお、文字等の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等があった場合は、手を挙げて監督者に申し出てください。
3. 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を記入してください。
4. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に横書きで記入してください。解答用紙の所定の欄以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としません。
5. 解答用紙以外は、試験終了後、持ち帰ってください。

実施年月日
-5.12.11
富山大学

1 次の文章を読み、ヤングケアラーの課題と必要な支援を考え、300字以内で述べなさい。

札幌市では、ヤングケアラーと思われる子どもを把握し、支援につながる仕組みを検討するため、札幌市立高等学校7校に在籍する高校生（約6,300人）を対象に生活実態に関するアンケート調査を実施した。調査方法は各学校を通じて、生徒に調査依頼文を配布、web回答又は、返信用封筒にて回収した（回収率約11.6%）。

「家族の中で自分が世話をしている家族がいる」と回答したのは4.1%で、世話する家族の続柄で最も多かったのは「きょうだい」で58.8%であった。世話について、「世話の頻度はほぼ毎日」が47.1%、「お世話の時間（平日）」で最も多かったのは「日によって違う」が38.2%、「生活への影響等」で最も多かったのは「自分の自由になる時間が取れない」で35.3%であった。

「相談経験無し」は67.6%、相談していない理由の内、最も多かったのは「誰かに相談するほどの悩みではない」で52.2%であった。「相談経験有り」の相談相手で最も多かったのは家族、友人で54.5%（同率）であった。

「支援して欲しいこと」で最も多かったのは「特にない」で52.9%であった。

参考資料：札幌市ヤングケアラーに関する実態調査業務報告書（令和4年1月札幌市）

2 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

花粉症一。くしゃみ、鼻水、涙。毎年、春先や秋に経験する、この不快は大変なものだ。しかし、そもそも花粉症は「症」というものの、はたして病気だろうか。

花粉症は、スギやブタクサなどの花粉の襲来に対する身体の防御反応である。できるだけ速やかに花粉を排除するため、くしゃみや鼻水や涙が出る。だから、この反応自体は身体の恒常性を保つうえで正常な仕組みだといえる。ただ、その反応ぶりが過剰なのでいささか困るということだ。ウイルスや細菌と違って、増殖したり、毒素を出したりすることのない花粉に対して、それほど大げさな防御反応は必要ない。清潔になりすぎた現代の環境の中で免疫系が力を持って余しているがゆえだという説もあるくらいなのだ。

花粉症の季節が来ると、私たちは仕方なく医者に行き、薬を処方してもらう。多くの場合、それは抗ヒスタミン剤である。抗ヒスタミン剤は花粉症を「治して」くれるのだろうか。花粉が襲来すると、それを感知した細胞はヒスタミン*を放出する。ヒスタミンは拡散して別の細胞に外敵の襲来を知らせる。一種の信号物質である。ヒスタミンの信号を感知するために、受け手の細胞にはヒスタミンレセプターというものがある。これは細胞の表面に突き出たアンテナで、ヒスタミンを捉える。その結果、細胞は、くしゃみ、鼻水、涙といった防御反応を開始する。

抗ヒスタミン剤は、ヒスタミンの「まがいもの」。似て非なる物質だ。抗ヒスタミン剤を服用すると、これがヒスタミンのかわりにヒスタミンレセプターに結合する。抗ヒスタミン剤は、形だけがヒスタミンに似ているので、ヒスタミンレセプターに結合するけれど、ヒスタミンが持っている信号の作用は果たさない。だから細胞は防御反応を起こさない。

このような状態のもと、花粉が襲来し、ヒスタミンが発せられると、ヒスタミンの信号は受け手の細胞に届きにくくなる。なぜなら抗ヒスタミン剤が先回りしてヒスタミンレセプターをブロックしてしまっているからである。かくして、抗ヒスタミン剤は花粉症に付きものの不快な諸症状を緩和することができる。しかし、これは花粉症を「治した」ことにはならない。

問題はこの先にある。もし生命現象が時計仕掛けの機械論的なメカニズムだけで成り立っているのであれば、抗ヒスタミン剤のように、ある反応経路を遮断することによって、情報伝達を止めることができる。それは毎回、同じ原理で作用し、同じ結果をもたらすはずである。

ところが、生命現象は本当は「メカニズム」と呼べるような因果関係に基づく機械仕掛けで成り立っていない。絶え間なく動きながら、できるだけある一定の状態＝平衡を維持しようとしている。そういう状態にあるものに対して干渉を加えれば、いつか、確かに平衡状態は移動して別の様相を示す。しかし、間もなく揺り戻しが起こる。

抗ヒスタミン剤を飲めば、花粉症の症状は緩和される。ただし、その効果はその場に限りて和らぐにすぎない。抗ヒスタミン剤によって、情報伝達経路が遮断され続けると、生命現象はどのように動くか。まずヒスタミンを作り出す細胞は、ヒスタミンの信号が届きにくいことを察知して、より多くのヒスタミンを放出するようになる。

一方、ヒスタミンレセプターを持つ受け手の細胞は、レセプターがブロックされることに対する反応とし

て、よりたくさんヒスタミンレセプターを細胞上に作り出すようになる。これは動的平衡が示す正の対抗制御（アップ・レギュレーション）と呼ばれる。こうなると花粉に対して、より多くのヒスタミンが放出され、より多くのレセプターがそれをキャッチして、より大きな反応をもたらすことになる。

つまり、抗ヒスタミン剤を飲み続けると、より過敏な花粉症体質を自ら招いてしまうという逆説が起こる。これが生命現象の本来の姿である。

…中略

では、いったいどうすればよいのか。花粉症は私たちの正常な動的平衡の一部としてある。それだけを切り離したり、治したりすることはできない。与えられたものを与えられたものとして、だましまし付き合っていくしかない。なぜならば、動的平衡には、解決すべき明確な因果関係はなく、そこにはバランスが存在するだけだからである。

出典：福岡 伸一：動的平衡 2, p216-219, 木楽舎, 2011 年より引用, 一部改変

* ヒスタミン：血液や組織の中に含まれる、あるたんぱく質の分解で生じ、これが過剰に遊離すると、アレルギー症状を呈する。

(1) 生命現象として筆者が考える「絶え間なく動きながら、一定の状態を維持しようとしている」について、文中から、その具体的な例を取り出し、100～200 字で述べなさい。

(2) 花粉症を正常な動的平衡の一部として考え、バランスをとって付き合うための方法として、あなたのアイデアとその根拠を 300 字以内で述べなさい。



科 目	小 論 文
-----	-------

受 験 番 号					

1 解 答 欄

5	10	15	20	
				5
				10
				15
				15 (300字)

(20×15)

採 点

科 目	小 論 文
-----	-------

受 験 番 号					

2 解 答 欄
(2)

		5		10		15		20	
									5
									10
									15
									15 (300字)

(20×15)

採 点

下書用紙

注意： この下書用紙に記入した解答は、採点の対象としませんので持ち帰ってください。

2

(2)

5 10 15 20

5 10 15

15 (300字)

(20 x 15)

下書用紙